

ああああ

ああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ。

ああああ

目次

読者数が二十万人はいる、この国でも有数の、とある有名な小説投稿サイトの日間ランキング一位に居座っていたから。

一位だぞ。一位。わかるかこの重み。この価値。

たぶん作者にしかわからない。投稿している者にしか理解できない。

そういうオレも、そんな小説投稿サイトを利用してはいるひとり、高校生になったくらいからシコシコと投稿している。もうあれから六年も経っていて、オレは大学三年生。そろそろ友人たちはみんな就職活動にシコシコせいをだしている中で、オレはまだなにもしていない。あわよくば小説家になればなんて甘い幻想を抱いていたからだ。

はつきり言おう。

それは非常に難しい。

ウェブで小説家になるためには、投稿した作品が累計ポイントで五万点以上はとらないといけないらしいが、オレの作品は一度もその点数に到達したことはない。原因はわりかしはつきりしている。

ランキングだ。

日間のランキングに載らない作品は、存在していないも同じ。基本的には読まれない。読まれないということは、評価もされないし、感想の数も少ない。存在の価値がない。死んでしまえばいい。

読者も暇じゃない。これだけ娯楽に溢れた世の中だ。わざわざ刺激の少ない小説という媒体を好きこのんで消費するやつなんてほとんどいない。

そのわりに書くほうは絵を描いたり動画を作ったりするよりもお手軽にできるから、わりと簡単にできる。できると思ってしまう。

だから、供給のほうが絶対的に多い中で、生き残る必要がある。ランキングはわかりやすいフィルターとして機能しており、読者のほとんどはおもしろい作品や楽しい作品を判断したりしない。

つまり大多数の読者はランキングの上位から、自分好みの作品を適当に読み漁り、適当に点数をつけていく。食い散らかし、食べ散らかし、ステーキの脂身だけを食べていく。おいしいもんな脂身。

あとは、バンドワゴン効果によって、点数が点数を呼ぶ。作品自体のおもしろさなんてものは置き去りにされて、ただ脂身、贅肉、そういった作品外の部分——、その作品が有名になることで、さらに評価されていくんだ。

オレが書籍化もできず、たいした点数もとれず、それでもほそぼそと書いている理由は、不透明な未来に嫌気がさした現実逃避だったかもしれないし、誰かに認めてもらいたいという歪んだ自己承認欲求だったかもしれない。

でも、そんなちつぽけな自尊心を満たすことすら、このサイトでは許されていなかった。

ランキングに載れないからだ。

ランキングに載るということは、それほどの重い。それほどの価値がある。

一位になれば、もはや背中に翼が生えるようなものだ。
なのにな。

さすがにわかりかねた。

意味がわからなかった。

ランキングの一位に載っていたのは、冒頭の意味のないように思われる、あの奇妙な文字の羅列だったからだ。

ああああ。

意味わかんねえ。

いくら読者様が自己判断もしないランキングやバンドワゴン効果に流されるだけの存在だとしても限度があるだろうがよ。

そんなに思考停止したロボットみたいな存在なのかよ。

感想欄を覗いてみる。

『すごく感動的なお話で感動しました』

『おもしろかったです。次の話も期待しています』

『ああああああ。萌えああああああ』

『主人公のかっこよさが印象的でした』

『作者様は天才ですね。こんな画期的な話を思いつくなんて』

いやいやいやいやいやいや。

なに考えてんの？

それとも考えてないの？

オレには読者がわからない。

読者に対してむしように腹立たしい思いがする。おまえらそんなもんじゃねーだろうがよ。ちゃんとおもしろいものや楽しいものを選び分ける能力があるだろうがよ。

(つまりオレの作品はおもしろいのをわかってくれよオマエ様)

読者には判断能力がないというのは本当だと思わなくもない。

なぜなら複垢しようが、相互評価しようが、面白そうな設定を丸パクリしようが、バレなきや、あるいは問題にならなければ、書籍化なんかは簡単にできてしまうからだ。

実際にそういった作品があると聞いた覚えがあるし、オレも実感としてランキング上位の作品がなにか似ているなどと思ったことは何度もある。

だから、オレの実感としては、そういった不正とまでは言わないがフェアじゃないやり方に対して、読者のほうは抵抗するだけの力がなあって感じている。

まるで政治と同じだな。これじゃダメだとみんなが思っているけど、結局は金持ちと権力を持っているやつが勝つように、やったもん勝ちみたいな世の中になっている。

ああああああああああああ

あああ

大学の講義を適当に受けていると友人のAが話しかけてきた。

わかっているとは思いますが、友人もオレもそれなりにオタクで小説とかを読むのが趣味の陰気なやつだ。ちなみにオレは小説を書いていることをだれにも言っていない。こんな恥ずかしい趣味を誰かに言うなんて狂気の沙汰に違いないからだ。

そんなわけで、Aとはあくまで消費者としての談義をする。

「なあ。小説サイトの一位のやつ読んだか？」

「あれか」

意味わかんねえよな。と続けようとした。
そしたら。

「いやあ、すげえ作品だったわ。面白さ天元突破しちゃってたわ」

「お？ おお……」

な。なんだ？

こいつもあの作品がおもしろいとか思っちゃってる系なわけ？

「あの。つかぬことを聞くんだが」

「なんだ？」

「あの作品のどこがおもしろいんだ？」

「え、おまえあの作品のどこがおもしろいかわかんねーの？」

「わかるかよ」

「おまえの感性、死んでるなあ」

「うっせーな！」

「いやいやいやいや、怒るところじゃねーべ。純然たる事実だろ。

きつとあの作品アニメ化までいくつて。映画化もされると思うぞ」

Aの視線は本気だった。

嘘とか冗談で言ってるようには思えない。

なんだ。オレの感性が変なのか？

家に帰ったあと、オレはもう一度あのサイトを見てみた。

あの変なランキング一位の作品は削除されているかと思っていたが、そんなことはなかった。

これ以上ないほどに特徴的なタイトル。

『ああああ』

まだランキング一位に君臨していた。

通常、小説サイトではビジュアルによる刺激がないため、タイトルやあらすじを看板にするしかない。

したがって、本文よりもむしろタイトルやあらすじにこそ力を入れるべきだという考えがある。特にあらすじすら読まない読者がいるから（そいつらは何を読んでるんだって話だが）タイトルを特徴的に

複垢なのか相互評価なのか、それとも評価BOTを走らせているのかはわからないが、こんな作品がランキング一位なわけではない。

いくら感性が人それぞれだからといったって、こんな意味不明な作品にみんなが高い評価をつけるわけがない。

「ん。じゃあ、感想もBOTか？」

そういうことになる。

そうじゃないとおかしい。

オレは感想欄を見てみる。

昨日の軽く十倍ぐらい書かれている感想を。

『やべええ。超胸熱展開』

『主人公が輝いて見えます。素敵です』

『歴史に残る超名作』

『作者様、オマエがナンバーワンだ』

『もうこの作品があれば、他の作品はいらないな』

なんだ。

なんなんだよ。

こんなふざけた作品で……意味も分からずみんな悪ノリしているのか。

投稿された二話目を見てみると、やっぱり同じく『あ』の羅列。

もしかして、暗号かなにかなのか？

それとも、オレのパソコンだけおかしくなっているのか？

それとも……、オレがいかれちまったのか？

オレの感性は正直なところゴミくずみたいなものだろう。べつにオレだってこの六年間でまったく感想をもらってこなかったというわけじゃない。そこそこにはもらってきた。

そうやって読者を単なる数としてカウントしてしまうのも嫌で、交流して仲良くなった人もいるっちゃーいる。

だけど、どうしてもランキングには載れない。

いまいちぱつとしない。

読者の見る目がないと思ったこともあるが、こんだけ長く続けていると、それがそうじゃないにしろ、少なくともオレと読者の多数派と

は合わないんだろう。

だったらテンプレ書けよって思うやつもいるかもしれない。テンプレっていうのは、このサイトで一番読まれる形式で、少なくとも中身はどうであれ入り口のところまで一番読まれるタイプの作品を選択したほうがいいってことだ。

それはわかる。

作者もウェブで公開する以上は、その作品をできる限りたくさんの人に読んでもらいたいと思っただけで、その思考様式に従えば、論理的な帰結として、読まれる作品タイプを選択すべきだということになる。

だったら、テンプレをはずす意味はない。

そうやって作品の個性が死ぬ？

そんな考えもあるかもしれないが、だったら文句をいうな。

読まれないことに文句を言うな。

十倍ぐらい面白い作品を書けばテンプレ作品と同じくらい読まれるかもしれないから、そこを目指すべきだろと思う。

こんな裏技みたいな方法で、どうやったかは知らないがランキング上位にきやがって。オレの憧れの……六年間も費やしてついぞとれなかった場所を易々と奪い取っていきやがって。

読者も読者だ。

こんなわけのわからない作品を賞賛するとか、頭おかしいんじゃないか？

おそらくBOTがかなりの数まぎれこんでいるだろうが、おそらく本当に生身の読者が書いている感想もあるだろう。

ノリで書いている。

いや、それもまた悪いとは言わない。読者には作品を読む権利があるし、好きなように感想を書く権利もある。

誹謗中傷にならない限り、あるいは規約違反にならない限りは、ほとんど何をしてもいい。

作者が規約に反しないなら自由に作品を書いて公開してもいいように、それと等価交換になっている。

だからノリで感想を書いてもいいだろう。

しかし、不快で不快でしようがない。それはオレが少なくともこの六年間、真面目に小説に取り組んできたと思っっているからだ。

ふみにじられたと思ったからだ。

たった六年ぼつちしか書いてこなかったけど。

それでもオレの人生の四分の一くらいは捧げてきたんだ。

どうして、こんな意味のないものが評価されるんだ？

わからない。わからない。気持ち悪い。世の中が気持ち悪い。

あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ
あ あ あ

オレはその作品の感想欄にあらん限りの罵倒を書きこんだ。

いままで創作ですら使ったことのないゴミのような言葉を書きこんだ。これで垢バンされるかもしれないが、それはそれでいい。

こんな作品を一位のまま放っておく運営も運営だ。

もしオレを垢バンするなら、そんな運営、こちらからお断りする。

正義の鉄槌である。

こんなにも文学的行為はない。

いまのいままでこれほどまでに筆が載ったことはなかった。

人生で初めて、歴史に残るようなクソ名文が書けたように思った。すぐに、反論はきた。

作者からのものじゃない。そもそも作者は投稿以外の何もしていない。

つまり、読者からの反論だった。

『この作品の良さがわからないなんてかわいそうですね』

『嫉妬じゃね？ こいつも書いてるみたいだぞ』

『ゴミクズ作品書いているゴミ作家がイキつちやったかー』

『さっさと作品消せよ。あ、この感想も消しといてね』

『気持ち悪いコメントだな。マジでこいつ頭おかしいんじゃない？』
うっせーよ。

こんなのに価値があるのだろうか？

誰からも見向きもされなかったときのほうが、まだ楽しかったし、何かを創っているという感覚がしたように思う。

今のオレにはなにもわからない。

世の中のほとんどの読者は『ああああ』が楽しい。

ああああが評価されるべきだという。

ちっともそうは思わないのだけれども、ひとまず売れてはいるし、それでいいのだろう。

それからどうしたかというと、

オレはいまだに『ああああ』と書いている。

ただひたすらに。

ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああ。

ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああ。

ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああ。

ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああ。

ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああ。

ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああ。

ああああああああああああああああああああああああああああああ

